

「富良野」映像事例解説

1. 「ルシュマン」甲斐氏宏和氏と「天心農場」北川光夫氏

【背景】

地域（地元）の優れた農作物の大部分が大市場に向かう。「大量生産・大量消費主義」

↑

地域農業の維持にはやむをえないが、地域の利点を地域の人間が享受できないという矛盾が生じる。

経済的利益のためには（食）文化的利益を断念しても構わないのだろうか。

経済的利益が文化的利益を損なうという、グローバリゼーションがもたらす**リスク**と同種類の**リスク**が存在する。← これは「リスク」（＝「決定」が招来するもの）なのか、それとも「危険」（＝「決定」に関わりなく生じるもの）なのか。 **「再帰性」**

【取り組みの目的】

地域の農作物を地域に還元する：地産地消

「地域主義」

地域の生産者とレストランが連携する。

「新しい集団形成」

【取り組みの内容】

富良野地域の食材の品質と種類の豊富さに魅せられて定住したレストラン・シェフ・甲斐氏が、農業生産者の北川氏に直接コンタクトして地元の優れた農産物を入手し、レストランの食材にする。 **「定住した外来者」**

シェフと農業者の相互提案：シェフが新しい農作物の栽培を提案し、農業者は別の新しい農作物を食材として提案する。 **「価値の共有」「着想」「非匿名性」**

ルシュマン：規模は大きくないが、顧客は広がりつつある。 **「小実業性」「low risk」**
外品を使う。 **「資源の有効活用」「経済効果」**

天心農場：「営利至上主義」への強い批判 **「非営利至上主義」「コミットメント」**

科学の反省的（**再帰的**）使用——環境に配慮した農業、環境の再生

「環境リスクへの対応」 ↑ 化学肥料メーカーとの協力

【成果】

「ルシュマン」は北の峰に店舗を新装した。

本州から「ルシュマン」の料理を食べるためにやってくる常連客が生まれた。

「天心農場」の経営も順調である。

【課題】

2. 「ゆうふれの里」(代表：宋戸眞知子氏)

【背景】

農協の介在(「営利至上主義」「合理性」)が、生産者と消費者の間の意思疎通を阻害していた。

丹誠を込めて育てた農産物が、(生産者にとっては)単なる商品として(「匿名性」)市場で売買される。生産者と消費者は匿名的關係(「非知」)。この匿名的關係が問題にならないのは、社会的に生産・流通システムへの信頼があるから。しかし、一旦商品に何か不都合が生じた場合(たとえば残留農薬)には相互不信が生まれ、それがシステムへの信頼を消滅させてしまうことがある。 「分業体制」「システム信頼」「**リスク**

流通機構がもつ問題。流通システムへの疑問 **「再帰性」**

【目的】

農家の主婦が消費者と直接コンタクトをもつことで、生産者が消費者の理解と承認を獲得する。

「価値の共有」「**新しい集団形成**」「コミュニケーション」「**非匿名性**」「**非営利至上主義**

【内容】

廃棄作物(間引きされるメロン)の有効利用 「着想」

農家の主婦たちの副収入 「経済性」

小規模 「**小実業性**」「**地域主義**」「**非匿名性**」「**low risk**

楽しい活動 「コミットメント」

農業界は男性社会 → 女性は非主流であるがゆえに男性よりも自由度が高い。

↓

農協(男性社会の規範に従う組織)に縛られずに活動する余地がある。

【成果】

「メロンの漬け物」に続く「もっちー」が商品化される。

旅行業者が、この取り組みに関心を示す。

【課題】

3. 「食のトライアングル」

【背景】

富良野は農業地帯だが、地元農産品を生かした目玉料理がない。

→ 観光地としての発展に限界がある。

「リスク」

【目的】

地域の農産物を素材にした目玉料理で集客力を強化し、地域の経済的に活性化させる。

「経済性」

【内容】

「食を通じたまちおこし」に関心の深い市職員・松野健吾氏（定住した外来者）が、農業者と飲食店を誘い、「食のトライアングル（農、商、消）」を結成し、飲食店に「オムカレー」のメニュー化を勧める。 「新しい集団形成」「着想」「小実業性」「非匿名性」

「オムカレー」は基本的に地元の食材を用いる。

「地域主義」

松野氏は、HP やメディアを駆使して宣伝に努める。

【成果】

「オムカレー」の知名度が向上する。

【課題】

4. 生活ごみのリサイクル（富良野市職員・関根嘉津幸氏の説明）

【背景】

廃棄された生活ごみが環境を汚染し（そのまま土に埋めれば土壌汚染、ごみを燃やせばダイオキシンの発生）、富良野の基幹産業である農業に深刻な影響を及ぼし始めた、という事実の認識。物質的生活の豊かさの追求が、環境汚染という副作用をもたらしたことに気づく。

「環境リスク」「再帰性」

【目的】

ごみを適切な方法で処理（リサイクル）して資源として生かすと同時に、良好な環境を維持する。

「リスク管理」

【内容】

農業という営みから「循環」というヒントをえて、地域社会の家庭ごみを細かく分別収集し、肥料と燃料にリサイクル（再循環）する。

「着想」「地域主義」

肥料は無償で提供し、燃料は販売を図る。

「小実業性」「非営利至上主義」

【成果】

「エコライフ」という意識が市民の間に定着する。

「価値の共有」

環境汚染が阻止される。

「環境創造 preservation of environment」

ごみ処理を担当する人々の間に仕事に対する誇りが生まれる。

「非匿名性」

「生活ごみのリサイクル」に関心をもつ人々が増え始め、ごみ処理場への見学依頼が増加している。つまり、ごみ処理場が観光スポットになりうる。

【課題】

5. 邪魔な石のリユース（森田工建社長・森田武氏の説明）

【背景】

空知川の扇状地である富良野地域では、川の氾濫がもたらした石が大量に畑の土中に埋もれている。また、採石で地肌が露出した山の姿が景観を著しく損ねている。

「環境リスク」

【目的】

畑から掘り出した石を効果的に処理して商品化することによって、山での採石を不必要にする。

「地域主義」「経済性」「非営利至上主義」

【内容】

「森田工建」は移動式破石機を考案し、邪魔な石の堆積場へ破石機を移動させ、その場で石を砂利へと商品化する。

「着想」「小実業性」「非匿名性」

【成果】

山での採石機会が減少し、景観の損傷度が低下する。
新しいビジネスチャンスが生まれる。

【課題】

6. 休耕地のリデュース（還元）

【背景】

富良野地域では離農者数が増大し、それによる休耕地の増加が景観を損ねている。

「環境リスク」

【目的】

損なわれた景観を回復する（リデュース）。 「環境創造 preservation of environment」

「地域主義」

【内容】

休耕地に菜種やひまわりを植えて、その花の黄色で美しい景観を作り出す。

「着想」「小実業性」「非営利至上主義」

菜種からバイオ・ディーゼルを精製する。

「経済性」

【成果】

「魅せる農業」が成立した場合には、「食」に貢献する農業に「視覚的鑑賞」という新し

い要素が付加される。農業が観光資源を生み出す1つの可能性がある。

【課題】

7. 景観の創造・自然のリデュース（「NPO 法人富良野自然塾」専務理事・林原博光氏）

【背景】

富良野プリンスホテルのゴルフ場の6コースが廃止されることになり、社長の堤義明氏が、倉本聰氏に跡地利用のアイデアを求めた。 「定住した外来者」

【目的】

失われた自然を回復する活動を展開し、同時に、その活動を通して、人々の環境意識を高めるという教育的効果を生み出す。 「着想」「環境リスク」「新しい集団形成」

【内容】

使命感に立脚して、明確なメッセージを伝える。

植樹：旧ゴルフコースに苗木を植える。

環境教育事業：身体的体験 「体験学習」

地球の歴史と人類の歴史との比較 「再帰性」「リスク」（「危険」？）

「小実業性」「地域主義」「非匿名性」「非営利至上主義」

【成果】

体験学習を通じて、来訪者の環境意識が高まる。

新しいタイプの観光地となる。

【課題】

8. 創造性に富む棟梁・柿本又一氏と自分探しの弟子・横溝慶行氏

【背景】

複数の地域社会を体験し、外来者への許容力を備えた人物（柿本氏＝援助者）の存在。 「定住した外来者」

都市社会（都会）への不適合

都会からの放逐／離脱・解放＝集団からの離脱 「リスク」「個人化」

【目的】

非都会的環境の中で自分を見つける（自分は誰なのか [identity] を知る）。

【内容】

理解のある（洞察力と共感力をもつ）棟梁とともに大工仕事（ものを創造する仕事）に従事する。 「新しい集団形成」「小実業性」「非営利至上主義」

棟梁も含めた理解のあるグループの輪に入る。「集団への参入」「コミュニケーション」
「地域主義」

【成果】

横溝氏は、自分の理解者に出会い、それによって自己を確立する。 「非匿名性」

【課題】

9. 演劇人・久保隆徳氏

【背景】

東京（大都会、競争社会）における挫折体験を踏まえて、大都会ではない場所（北海道）に新天地を求める。 「リスク」

【目的】

北海道で達成感をえる。それを通して自己を確認する。

【内容】

「富良野塾」に入り、演劇の修業に励み、卒塾後も「地方」としての富良野に留まり、演劇活動を継続しつつ、後進の養成を行う。

「定住した外来者」「集団への参入」「コミュニティ」「小実業性」
日常の演劇活動を通じて、地方の特性を認識し、同時に中央（東京）の属性を把握し直す。 「地域主義」「非匿名性」「再帰性」「非営利至上主義」

【成果】

地域在住の演劇人としての自己を確立する。 「自己実現」
地方発でありながら一流の演劇活動を実現させる。

【課題】

10. 「くまげら」森本毅氏と「ふらののガラス屋さん」山口一城氏

【背景】

森本氏は、富良野を来訪する観光客を接遇するために、「くまげら」を開店した。 「小実業性」「経済性」「地域主義」

山口氏は、50歳でそれまでの世界から離脱し、自己の新しい可能性を発見するため、日本一周の旅に出て、偶然富良野を訪れ、森本氏と出会った。「リスク」（＝未知の世界）

【目的】

良好なコミュニケーション関係の中で、各自が（経済的成功も含む）自己実現を図る。

【内容】

森本氏は、外来者と地元の人々の仲介を行い、外来の富良野定住希望者を援助する。 「非営利至上主義」「非匿名性」「新しい集団形成」

「現代都市文化論演習 2009」

山口氏は、地元の人々の支持を受けて「ふらののガラス屋さん」を創設し、商域を広げている。 「定住した外来者」「コミュニケーション」

【成果】

森本氏の姿勢が、結果的には自信の事業の成功にもつながる。また、山口氏の事業も、目下のところ成功している。 「経済効果」

【課題】